

思考と表現を結びつける活動

—「考えていること」を自分の立場で表現するまで—

新居 知可子

【キーワード】「総合」・コミュニケーション能力・思考と表現の統合

1 はじめに

筆者にとって日本語教育とは、学習者が自分の言いたいことを自分の立場で表現できるようになることである。そのために、教室は学習者が主体的に自分の考えを他者に向けて表現する場となることが重要であると思う。しかし、自分の「言いたいこと」を表現するためには、語彙や文法項目をどれだけ正確に習得し、それらを巧みに操って表現することができるのかといった言語能力だけが問題ではない。自分自身の内面と向き合い思考し自分の「言いたいこと」が何なのかを見出していくプロセスが重要である。

表現することと思考することは本来切り離せないものである。そして思考する「私」がいなければ表現することはできない。だからこそ、「私」は表現し、そうすることで他者との関係をひとつひとつ切り開き、社会の中に「私」としての居場所を築いていくことができるのである。思考と表現が往還し活性化していくことが言語活動の意義である。しかし、いつのまにか表現することと思考することは切り離され、表現する際に自分の立場で「考える」という行為が忘れられているのではないか。日々の生活においてどこまで私は「考えて」ものを言っているであろうか。さまざまな外部からの情報を取捨選択することに追われ、そもそも立ち止まって考える時間がどれだけあるのだろうか。

総合活動型日本語教育（以下、「総合」）の目指すところは、思考と表現の活性化である。細川（2004）は「学習者の言語メカニズムを、個人と社会の関係を考えさせるレベルでどのように実践的に運用させるか」が課題であるとして、「思考と表現の統合という形で学習者自身の言語活動をどのように活性化させていくか」という方向にこそ言語教育の専門性があるとしている。ここでは、考える主体として学習者を尊重し、学習者の「考えていること」を内容とし「引き出す」ことが活動の中心となる。

筆者は、「総合」の現場にボランティアとして参加し、実践を観察することで、思考と表現が統合するまでのプロセスが簡単ではないということを実感した。本稿では、

一人の学習者が、自己のテーマに即した表現活動を通して、自分のことばで「私」がどう考えるのかを思考し表現していく過程をみていきたい。

2 活動の分析

2-1 分析対象クラスの概略

本レポートで取り上げるデータは、2006年度秋学期(10月～1月)に早稲田大学日本語研究教育センターにおいて開講された「4β-B」(担当者I, F)クラスの音声データを文字起こししたものと学習者のレポートである。学習者は4名であり、担当者(I, F)が週の前半(月・火1, 2限、水1限)の5コマを前半2コマと後半3コマに分担して担当した。筆者は、ボランティアとしてこの活動に参加し、レポートの作成に関わった。

この活動は細川(2002)による「総合活動型日本語教育」をベースに設計されたものである。学習者はそれぞれのテーマで動機文を書き、教室内外の他者との対話を通して自分の考えを深め結論を書く。この一連の作業を通して一本のレポートを完成させる。ここで重要なことは学習者が自分の設定したテーマを自分の問題として捉えることで「自分にしか書けないレポートを書く」ということである。担当者はこの目標に向けて学習者から意見を引き出し誘導し、時には追い込んでいく。特に、活動初期の動機文を書く段階では学習者の「個」としてのオリジナリティ(固有性)が要求される。学習者が選んだテーマが、学習者自身とどのように関係があるのか、一番言いたいことは何か、を常に問うことで、学習者がレポートのテーマを「自分の問題として捉える」よう促していくのである。

2-2 取り上げる学習者Aについて

筆者が取り上げた学習者Aは、4人の学習者の中でも語彙も豊富でありコミュニケーション能力は高い。一方で、Aは活動当初から、「自分のことは話したくない」「自分のことはよくわからないし、つまらない」と言った発言を繰り返し、自分と向き合い「私」を表現することは好まなかった。本稿では、Aのレポートの作成を追っていくことで、思考と表現が結びついていく過程を見ていくこととする。

Aは活動当初、「自分にしか書けないレポートを書く」ということを「自分の好きなテーマ」について書くことと捉えていた。相互自己評価の項目決めの段階で次のように発言している。「自分の書きたいことを書く。私のβのイメージはこれ。自分が好きなテーマ、サブテーマを決めてそれについて書くのはβ。」(2006年12月18日)しかし、一方でその「書きたいこと」が何であるのかがなかなか見えなかった。「私は皆のテーマとあわないかもしれない。でもアイデンティティとかは書きたくない。」(2006年10月16日)また、「自分以外のテーマについて書きたいと思うので他の人とちょっと違うと思う。3ヶ月も自分のことを考えるのは難しい。」(2006年10月23日)と発

言していた。Aは、「自分の問題として捉える」ことを自分について書くことと解釈し、そのようなテーマでレポートは書きたくないと言っていた。それに対して担当者は「自分のことをテーマにしなければいけないというわけではない。テーマは本当に何でも良い。ただ、そこにAさんの考えが現れていることが大切だ。」といった内容を何度も繰り返していた。

最終的に結論では、自分の立場でA固有の「考え」を表現するに至ったが、動機文の段階ではテーマを自分の問題として捉えられず、対話に入ってから担当者に書かされているように感じると発言した。Aは活動を振り返り、「私の場合、クラスでCMについて書きたいと決めたいけれど、そのテーマはすごく広い。なので、何について書くのかははっきり決めていない。」(2006年12月18日)と、テーマの焦点化がされずに、テーマと自分との関係があいまいなまま対話に進んでしまったことを原因に挙げている。

2-3 データ分析：学習者Aが「考えていること」を自分の立場で表現するまで

学習者A自身のレポートや、教室内でのインターアクションから、テーマの設定から結論に至るまでを振り返り、Aがどのように、テーマと自分との関係を明確にし、思考を深め「考えていること」を自分の立場で表現していくのかを検証していきたい。

2-3-1 学習者Aの動機文から：テーマの選択から動機文の作成

学習者Aのテーマの設定と対話に至るまで動機文の検討の過程を振り返ってみたい。

Aは始め、最近話題になっている社会問題（安倍政権）についてテーマにしたいと言っていた。しかし、この活動では「自分にしか書けないレポート」を書くことが大切であり、いかにレポートのテーマを「自分の問題として捉えているか」というオリジナリティが最も重要であるという指摘を受け、「広告の影響」について書くことに決めた。以下は、Aの第一回目の動機文とそれに対するインターアクションである。

今日、サブテーマを選びました。そのテーマは広告の影響です。特に、日本のCMと他の広告について書きたいと思います。共通テーマは選択と決断ですから、何をかうか自分で決められないとき、広告からの影響で、選択させられることについて決めました。…中略…アメリカの大学で広告について研究やりましたが、日本のCMのことあまり分かりませんから、もっと知りたいと思っています。もちろんクラスのポイントはオリジナリティですから、研究より自分の意見のほうが大切だと思います。広告からどんな影響があるかを分かるようになるため、もっと考えなければなりませんから、このテーマはチャレンジなんですけど、興味がありますからぜひ出るとおもいます。(2006年10月23日)

A：テーマは商品の選び方。日本のCMに興味を抱いているから、アメリカとのCMとの違いについてやりたい。でも今、決めたくんですけど。

I：Bさん、何か言いたそうな顔してるけど。アドバイスはしないんですか。

B：難しそうなテーマですね。自分の意見を書けるんですか。Aさんは日本人の買い方を知ってますか。

A：あー。日本人の意見はわからないですけど、自分の意見で。

・・・中略・・・

A：でも他のテーマ（安倍政権について）はだめでしたから。

B：広すぎるでしょう。個人的に書けないでしょう。決断というテーマとどういう関係があるんですか。どうやって広告に左右されたことがありますか。

- A：「まだ考えてない。」前のテーマはみんな興味がなかったけど、CMならみんなが興味あると思います。このテーマは今思いついただけなので、「良く考えてあとで決めます。」
- I：今のBさんが言ってくれたところが大切なポイントだと思いますけどどうですか。
- A：「考えてみます。」前のテーマはダメだったから・・・。前の私のテーマはみんな、興味なかった。でもCMならみんなに興味があることだと思う。
- R：皆が興味があるかどうかよりも自分が書きたいことを書けばよいと思う。
- C：Aさんは、学問的なことじゃなくて個人的な考えを、自分の考えを書きたいのでしょうか。
- A：もちろん。「自分の考えを書くのは一番簡単なポイント」このまま研究したいのですがベータの研究には合わないかもしれない。(2006年10月23日)

「広告の影響」について書く理由が、以前研究をしたことがあることと、他の学習者の興味をひく話題だからということが挙げられており、テーマと自分との結びつきは非常に弱いものであった。また、このクラスのポイントがオリジナリティであるから「研究より自分の意見のほうが大切」だとしながらも、「もっと知りたい」「分かるようになるため」という動機文の表現から、このレポートの目的が知識、情報の獲得に置かれていることがわかる。Aにとって自分の問題として切実に考えたいことではなく、レポートを書くという行為のためのテーマ選択であるといえる。

BはAに対して、「自分の意見を書けるんですか。」「広すぎる、個人的に書けないでしょう。」などと、テーマ設定のあいまいさや自分との結び付きという観点から鋭く指摘している。さらにCも同様に、「自分の考えを書きたいのでしょうか。」「自分で自由に書けたら問題ないでしょうけど。」と「自分の考え」を書けるのかを確認している。

一方でAは、学問的なことではない「自分の考えを書くのは一番簡単なポイント」とし、テーマと自分との関係を問われると「まだ考えていない」「よく考えてあとで決めます」と答えている。Aにとって「自分の問題として捉えること」は、テーマを研究し「自分の考え」を書くことである。だから、テーマと自分との結び付きがあいまいになる。その点に他の学習者が気づき、Aへの指摘へとつながった。

続いて、Aの動機文のメモの検討の様子である。Aは活動を通して何度も動機文を書き直したが、以下のようなCMの特徴を羅列するようなものが多く、他の学習者から「ここに書かれているのは、一般論。Aさんの意見は書いていない。」との指摘があった。それに対してAは「一番何に興味があるのか自分でもわからない。」「自分のことは書きたくない」「つまらないし、自分のことについては、よく分からない」と発言していた。

- CMを何回も見ることによって、そのCMの商品をいつも買いたくなる。また同じ会社の別の商品にいつも興味をわく。
- CMは消費者に対して買いたいという気持ちを持たせる影響以外、CMを見ることで会社の新発売の商品を知ることができる。CMで新しい品物を発表したら、消費者がその品物を知るようになる。そうすることによって、消費者に対して新しい商品選べるという機会を与える。もし消費者がそのCMを見て、新発売商品に興味を持ちその商品を買うことは影響されていることだろうか？例えば、私はいつも食べているアイスクリームの会社が新しい味を発表することをCMで見たら、「この味を食べてみたい！」という気持ちを持つようになる。
- 他の質問はどういう気持ちで商品を買う？(動機文メモ：2006年11月5日 mixi に up されたもの)

I：影響や決断、選択はAさんのテーマと関係がないのですか？先週「影響されやすいというよりも影響される自分について考えたい。」と言っていましたよね。

A：今、まだ分からない。Bさんは自分のことを通して「何が食べたい？」という選択や決断について書くけど、私

は自分のことは書きたくない。

I: なぜ書きたくないのですか?

A: つまらないし、自分のことについては、よく分からないからです。

D: 私はわからないことを考えて、分かるようになりたいから書いた方が良かった。

A: 自分が「何を買うか」を考えたくない。興味はない。「自分の買い物の選び方はつまらない。」Bさんや他の人生についての質問は面白いと思いますけど、CMについて書きたいのだけど「決断と選択」にどうつながっているのかがわからない。

C: 一つの可能性は外国人は外国に行く時どうやって決断しますか。Aさんが外国人として日本人とは違った影響を考えたらいいのでは。アメリカのCMは好きじゃないと言っていた。日本のCMは日本の文化を表すから好き?

A: それも興味深いですけど、オリジナリティが必要ですからだめだと思います。

I: オリジナリティとは、ある事実について「どう考えるか」だからテーマを「自分の選び方」や「決断の仕方」にする必要はない。

D: たぶん「決断」について気にしすぎていると思う。

I: 気にしなくて良い。クラスの共通テーマだから書かなければいけないというわけではない。

A: よかった。私もさっきの文化について興味があるから文化について書きたい。

I: CMの影響についてはどうなったのですか。

A: CMに影響されない人はいません。何にも影響されないで生きている人はいません。

C: 影響されるか、されないかの問題ではない。情報をそのままとるか、考えて受け止めるか。

A: いや、無意識?無意識に選択してしまうこと。(2006年11月6日)

Aは「自分のことは書きたくない」し「CMについて書きたいが「決断と選択」にどうつながっているのかがわからない」ことから、テーマが見えなくなってしまうと言っている。Aはテーマと自分との関係を問うのではなく、自分のサブテーマ(CMについて)とクラスの共通テーマ(決断と選択)との関係や、教室目標としてのオリジナリティについて気にしている。オリジナリティも共通テーマの「決断と選択」も、テーマを自分に引き付けて「私はどう考えるのか」という固有性を問うことと密接に関わっている。必然的に自分自身と向き合い考える必要が出てくるものである。Aは「広告の影響」というテーマを自分の問題として捉えられていないということに気づいたといえる。

上記のインターアクションは、Aのテーマのポイントを皆で確認するために始まり、結局以前からずっと話し合っている「影響」というキーワードに戻ってきた。

同様に以下のインターアクションにおいても、Aが一番言いたいことは何かが繰り返し問われている。動機文の書き直しも七回目となりA4用紙2ページ分と確実に長くなっていた。また、一般論しか書かれていないという指摘に対して、なぜCMの影響に気づき興味を持ったのかが、大学で日本とアメリカのCMの対比についてのプレゼンテーションを行なった自分の経験を記述することで表現されていた。しかし、CMの影響について興味を抱いたきっかけと、CMの影響についての情報の羅列という印象が強く、なぜこのテーマなのか、Aにとってどのような意味を持つのかは不明確であった。しかし、上記のインターアクションと比べて「Aさんが話したいのはどれですか。」と問われることで、少しずつではあるが、A自身の口から「書きたいのは知らないうちに影響を受けることと影響を受けて買うこと。」「私の場合は2つの影響に気づいたから書きたかった。」と書きたいことが明示され、Aという人間がこのレポー

トで表現したいことが引き出されてきた。

C : CM に対してあまり考えたことがないのでよく話しませんが、B さんが話したように CM にはあまり情報がないですよ。ただイメージを作って流すだけ。情報があるのもありますけど。A さんが話したいのはどれですか。私を感じたのはイメージを作って流すこと。

A : 両方です。書きたいのは知らないうちに影響を受けることと影響を受けて買うこと。

C : A さんが話したいのは情報を伝えるのではなくて、イメージを作って流すことではないかと思ったんですけど。

A : CM の中に情報があるかないかは気にしない。

C : 情報があるかないかは別にして CM の影響を良いと思いますか、悪いと思いますか。

A : 私の場合は 2 つの影響に気づいたから書きたかった。アメリカの CM より日本の CM ののがおもしろい。例えば車の CM。(例を挙げて説明する)

D : A さんは学期の初めからずっとそのことを言っているから面白いと思う。

C : イメージと情報をはっきりわけて書いた方が分かりやすいじゃないかと思えますけど。

A : 分けても考えられるけど二つとも書く。CM の影響、意識的と無意識的。

C : A さんが大切に考えるのは無意識的な方と思えますけど。

A : 問題なのは無意識的だけど、CM には良いことと悪いこと両方あることを書きたいです。(2006 年 11 月 20 日)

2-3-2 学習者 A の対話から：テーマの焦点化

さらに A は動機文を書き直し、教室外で友人 T と対話を行なった。教室外での 3 回の対話とそれを教室内に持ち帰り議論することで A の言いたいことが形になってきた。対話を通して結論に至るまでを考察したい。

以下は A の 2 回目の対話報告の検討である。担当者 F が、A はよく自分の意見を話しているが、対話全体として見ると話がかみ合っていないのではないかという指摘をし、A と対話相手の T の立場の違いについて確認した。続いて、A が一番何について話したいのか、この対話のポイントはどこかが検討された。

以下のインターアクションを通して、A 自身がこのレポートで言いたいところが、はっきりしてきたように思う。これまで CM の影響について書きたいという漠然としたテーマであったが、一番言いたいところは「CM からの影響を受けすぎると、自分が何を欲しいのかわからなくなって自分を見失ってしまう」だから、「批判的な考えを考えたほうがいい」というメッセージであるということがわかった。これまでクラスでのインターアクションでは、A の CM の影響に対する考え方や立場がはっきりと表現されず、A がこのレポートで何を伝えたいのかが不明確であった。そして、何度も同じテーマで話し合ううちに、他の学習者は動機文から読み取れないことまで、A の言いたいことをなんとなく憶測で「理解」して深く掘り下げることはなかった。しかし、T という実際の対話相手を目の前にして、対話の焦点がすれちがうことや、自分の話したいことが話せないという経験をし、自分の話したいことを話すためには、テーマを焦点化しーから説明していかなければならないということが見えてきたのではないだろうか。

F : なんか、僕の印象では A さんが話していることと相手が話していること、A さんが話したことと T さんが話していることがちょっと合っていないような感じがするんですけど。…中略…ここ (A さんの立場：消費者、自分

が気をつけたほうが良いということ) がうまく伝わっていないんじゃないかな。Aさんも確かに自分の意見を良く話しているけど。Aさんの立場はCMを作る側の意見でしょ。そこがうまく合っていないんじゃないかな。

C: これは影響と、広告とかCMの影響じゃなくて、その影響をどのふうに受けるかについて話したい? 書いてあるのを見るとなんか「自分の自由を守るために」ですよね。だから、どのように影響を受けるのか、Aさんにとっては良いかはわからないですけど、そこが私には重要な部分。CMとか広告とか影響は受けますよね? だからAさんが話したいのは、その影響をどのように受けて・・・

A: どういう風に受けるかはすごく答えづらいですけど、その影響についてどう考えるか・・・

・・・中略・・・

B: でも、その・・・Aさんはやっぱりどんな立場からCMの影響を見たい?

A: やっぱりCM作ったことないですから、消費者の立場から。どんなふうに影響を受けるっていうことより、どうやってその影響を受けずに、受けないようになるのが大切。

B: やっぱり何が言いたいですか。

A: ええっと・・・最後の部分「CMからの影響を受けすぎると、自分が何を欲しいのかわからなくなって自分を見失ってしまう」

B: でも、そのことをわかるようになるために、影響はどうやって人へ行き着くとか、それは私はそのAさんのレポートの本質だと思う。そのことについて書きたいならそれは大切な点だと思う。その、どうやって影響も行き着く?(しばらく沈黙) Aさんが書いたように自分の選択ができるように影響の受け方を私たちがどんなふう・・・

A: どんなふうに影響を受けるかわからない。どうやって影響に抵抗するかのほうが面白い。消費者としてそのこと分かるでしょう。どんな風に受けるかは全くわからない。

C: どんなふうに抵抗しようか、それは?

A: それはあの、CM見ると、批判的な考え、考えたほうがいい。

C: でも、批判的な考えを持って受けるならどうですか。CMを見ると、CMから影響されますよね。でも、その影響されるとき、そのままに受けるんじゃなくて批判的な考えを持って、「これは本当じゃない」とか「それは何か問題ある」と思いながら、それを受けるのがいい。

A: 抵抗できる。みなさんに何回も言ったけどそこに情報がなければ抵抗できる。(ソフパソクのCMを例にあげる。) 情報がある場合も何でこの情報を発表してるのかを考えた方がいい。

・・・中略・・・

C: 私が今の話を聞いてて思ったことはCMが悪いかどうかの問題じゃなくて、CMを受ける人がどのように受けるのがいいかその問題じゃないですか。

A: 私はそのような、影響によって違うけど、そのような影響が悪いと思います。場合によって違うけど、例えば、CMで見たことを思い出してそのことだけで買ったら悪いこと。もし買うつもりがあって買ったら大丈夫だけど、買う予定がなかったのにCMからの影響を受けすぎたり、買えば、どこの考え。それは私の考えじゃない。ほかの選ぶ方法がいっぱいあるんですね。あのCMを見たからこれを買いたい。それは一つの選ぶ方法、でもその方法がよくない。・・・中略・・・それだったら、たぶんほかの人と対話したほうがいい。実はそれについて話したかったけどだめだった。(2006年12月12日)

上記のインターアクションを受けてAはTと教室外で3回目の対話を行なった。

「批判的にCMをみて影響されないようにするためには、どのようにしたらいいと思う?」という問いから始まり、「自分が新しいものや知らないものほど、影響を受けやすくなるんだね。だからCMの情報だけに頼らないで、CMを見るといつも「なぜか?」と批判的に考えることが必要。」というAのまとめで対話は終わっている。

この対話に対して、他の学習者から「Aさんの人生に関係がありそう」「今までAさんはどうしてこのテーマに興味を持つようになったかちゃんとわからなかったけど、今回の対話を読んでわかった。」また、「ほかの対話に比べて一貫性がある」「前の二つを読むと、Aさんは何となくCMに抵抗するのが大事とわかったけど、言いませんでした。けど、今回は本当にはっきり言いましたから。」という肯定的なコメントが多くでていいる。また「今までは気になったことを言っただけ。でも今回はどうするかと話しました。」というように、Aの発言の質の変化も挙げられている。つまり、Aがテーマ

を自分の問題として捉え、レポートを読む読者にもテーマとAとの関係が見えてきたといえる。

2-3-3 学習者Aの結論から：テーマに対する自分の考えを自分の立場で書く

3回の対話とその後の授業でのインターアクションを受け、最終的にAは以下のよ
うな結論を書いた。

私は影響に抵抗すると自分で賢明に選択できるという結論に達した。CMからの影響を受けて購入の場合はもちろん、日常の小さな決断も大きな決断もそのことが役に立つと思う。「それはいいけど、どの風に影響に抵抗するんですか」という声がそろそろ聞こえてきた。簡単に言えば、影響に抵抗する方法は影響を批判することである。影響を批判すると外界の影響に免疫になる。非常に難解なことかもしれないけれど、決断する瞬間に外界の影響を見破ればいい訳である。その方法は難しく考えないで「純粋に私の考え？」とか「影響を受けてきたかも」程度で実現可能である。そうすると、自分の人格を守れると思う。どの風を選択することから自分の人格がくつきり浮かび上がると思う。選択するとき、自分にとって何が大切かを判断するのではないだろうか。外界の影響を受けるとその判断基準が変わると思う。例えば、「高い・安い」を基準に判断している人は、「費用効果」が大切なことに優先順位をつけるにあたって、判断材料になる。その人の選択する傾向は一番安いものを買っている。しかし、その人が影響を受ければ、「好き・嫌い」を基準に判断すると「費用効果」より「外観」のほうが大切なことに優先順位をつける。つまり、その人の基準のパターンが影響のせいで変わった。CMの例だと、いつも買っている節約の品物の代わりにCMから見たもっと高い品物を買ってしまう場合が少なくないだろうか。自分の判断基準がはっきり分かると影響をうけるかどうかともわかるようになる。「私のいつものとおりと違うな」。つまり、自分の決断するとき、どのように考えているか傾向を理解しておけば、影響に抵抗できると思う。そうすると、自分の人格を守りながら、選択するとき、影響のせいで自分にとっての失敗は少なくなる。

これまで、AはCMという広いテーマの中の一項目としてCMの影響を捉えていた。しかし、対話を経て書かれた結論は「影響」そのものに対してどう抵抗していくかが主題となり、CMはその影響を及ぼす一つの例、影響について考えるきっかけにすぎなくなった。また、タイトルは最終的に「選択における影響と抵抗」となった。

選択の際の外界の影響に対してAはどうしていききたいのかという、Aという人間の視点からの考えが書かれているように思う。つまり、「Aにしか書けないレポート」として、テーマを自分の問題として捉え、自分の「考えていること」と向き合い、自分の立場で表現するに至ったのである。

2-4 考察

Aのレポート完成までのプロセスを振り返ってみると、CMの影響という広いテーマの中から、自分の言いたいことが何なのかを抽出するまでに非常に時間がかかったことがわかる。それに対して、2回目のTとの対話を終えたころから、自分の言いたいことが次第に焦点化され、そこからは自然と結論に至ったという印象を受けた。

では教室外でのTとの対話の何がきっかけとなったのであろうか。それは、人と人が対話をする必然性に関わってくるのではないかと思う。Aは活動開始当初から、レポート（動機文）作成を教室活動のための行為として捉え、それに対する他者とのインターアクションもそのレポートの遂行のためのものであった。A自身が自分と向き合い考えるためのテーマではなく、Aにとっては授業のリソースとしてしかレポート

を書くという行為とその推敲の課程を捉えていなかったのではないだろうか。しかし、教室外のTにとっては、(Aがレポートを書くための対話であると理解はしていても)その対話の中身はAとTの興味・関心がなければ進行していかない。粘り強く耳を傾け言いたいことは何か、考えていることは何かを引き出してくれる他者(担当者や他の学習者)の存在も教室の外には存在しない。自分で対話をしながらその関係を築きあげていかなければならないのだ。AはTと向き合い対話をする中で、自分が何のためにこのテーマで話し合うのか、一番何について話したいのか、自分はそこから何を考えていきたいのかという何かを表現する際に欠かせない自己と向き合い思考することのきっかけを得たといえる。これらは活動を通してずっと問われてきたことである。また、対話報告を教室に持ち帰り他者とのインターアクションを通してTに何が伝わって何が伝わらなかったのかを客観的に問い直すことができた。Aは、自分のテーマを焦点化し、自分の言いたいことを表現していくために、自分自身と向き合い思考し、他者とのインターアクションを繰り返すという思考と表現の往還活動としての言語活動を通して、テーマに対する自分の考えを自分の立場で表現するに至ったのである。

3 結論

学習者が自分の言いたいことを自分の立場で表現できるようになるためには、「言いたいこと」つまり自分のテーマを自身の問題として捉え、自分の立場で「考える」ことが重要である。そのためには、自分自身の内面と向き合い思考し自分の「言いたいこと」が何なのかを見出していくプロセスが重要である。そうすることで初めて、思考と表現が結びついた形での言語活動としてのコミュニケーションが成立するのである。

しかし、私たちは日ごろから自分の言いたいこと、表現したいことを明確には持っていないし、なんとなく興味・関心を抱いていることを言語化して捉え直すこともあまりない。少しずつ自分の内面と向き合い自らを語ることで、言いたいこと、考えていることは形を成していく。その過程を支えるのは他者とのインターアクションである。他者に向けて表現し、また自己の内面と向き合い思考するという思考と表現の往還を通して少しずつ「言いたいこと」は言語化されていく。

「総合」においては、教室目標のオリジナリティ「レポートのテーマを、自分の問題としてとらえているか。」が、学習者の言いたいこと、テーマの焦点化の役割を果たしていた。常に、自分がどう考えるのかと、自分を軸に考えるよう促すことで、レポートがテーマに対する情報の羅列というプレゼンテーションに陥ることを防いでいた。今回の活動では、結論になってやっとAの固有の「考え」が見えてきたため、A固有の「考え」が、他者からの働きかけによって揺さぶられ、大きく自己変容を遂げるまでには至らなかった。しかし、テーマを自分の問題として捉え考えることで、自分の

ことばで表現することができた。思考と表現を結びつけることができたのである。

以上のことから、自分の考えを自分の立場で他者に向けて表現していくためには、学習者自身が主体的に自己のテーマを見出し言語化していくことと、その表現に耳を傾け、時には批判しながら「考えていること」を引き出していく他者（他の学習者や教師）の存在が欠かせないということが分かる。つまり、学習者が主体的に自分の考えを自分の立場で表現していくためには、テーマを焦点化し自分の問題として捉えることと、そのプロセスを支える他者の存在が必要なのである。

4 終わりに

筆者は、活動当初からテーマのなかなか定まらない A のことが気にかかっていた。それは、筆者自身の経験から、教室活動においてレポートを書くという行為は、レポートを書くことそれ自体が目的化してしまい、テーマを自分の問題として捉え、テーマと自分との関係についてそもそも問い直すことが難しいからである。しかし、「総合」ではこのような形だけのレポートを求めているのではなく「自分にしか書けないレポート」としてのオリジナリティを求めることで思考と表現が統合されることを目指している。表現することそのものに対する根本的な考え方を異にしたまま、一つのテーマについて 3 ヶ月書き続けるということは、自分自身でもテーマが定まらないまま、どこへ向かっているのかもわからずにレポートを書き、毎回「オリジナリティがない」といった指摘を受け続けるということである。レポートに対する評価だと頭でわかっただけでも、やはり自己否定されたような気持ちを抱くのではないだろうか。実際に A は活動の中盤ころ、教師に対してこの活動に対する不満を爆発させた。しかし、それでも A は最後まであきらめずテーマを焦点化させ自分の「考えていること」を表現した。それは、やはり教師や他の学習者といった他者の存在と、教師のスタンスと枠組みとしての教室設計が揺らぐことなく一貫していたからである。本活動を通して学んだことは、この一貫した教師のスタンスと枠組みとしての教室設計の重要性である。もちろん教師は日々柔軟にその日の教室実践を行なっているが、やはり真にあるのはゆるぎない日本語教育観である。「思考と表現の統合という形で学習者自身の言語活動をどのように活性化させていくか」を常に考えることで、学習者が自分の考えを自分の立場で他者に向けて表現する活動を展開していくことが出来るのである。

【参考文献】

細川英雄（2002）『日本語教育は何をめざすか—言語文化活動の理論と実践』明石書店
細川英雄+NPO 法人スタッフ（2004）『考えるための日本語』明石書店

（アライ チカコ・修士課程 1 年）